

鹿大ジャーナル

鹿大広報

特集

鹿児島大学が担う

地域課題への取り組みと人材育成

「稲盛和夫鹿児島大学名誉博士を迎えて」
「稲盛和夫京セラ名誉会長と前田芳實鹿児島大学長の対談」



08 潜入ルポ ~学びの部屋~

身の回りにある化学物質から覗く有機化学の世界

研究支援センター機器分析施設
澤田 剛 准教授

10 先輩からのメッセージ

OB: 東芝ラグビーチーム ブレイブルーパス選手
中尾 隼太さん

12 研究室からSCHOLAR INTERVIEW

濁りも泥も、多種多様な生物を育む「命のゆりかご」

国際島嶼教育研究センター 奄美分室 藤井 琢磨 特任助教

「農」で再現する150年前の絆。「薩長同盟酒プロジェクト」

農学部農業生産科学科 下田代 智英 准教授

16 鹿大トピックス

鹿大と琉大 産学連携活動に関する 協力推進協定締結 ほか

19 進め! 鹿大生

「世界観を変える」海外インターンシップを 1人でも多くの学生に

水産学部水産学科3年生 鈴木 涼良さん

さっつんが行く!

研究支援センター環境保全施設



特集

鹿児島大学が担う 地域課題への取り組みと 人材育成

稲盛和夫京セラ名誉会長と
前田芳實鹿児島大学長の対談

～稲盛和夫鹿児島大学名誉博士を迎えて～

前田 お忙しい中、お時間を取っていただきありがとうございます。
本日は「鹿児島大学が担う地域課題への取り組みと人材育成」をテーマにお話を伺い、先輩である稲盛名誉会長から鹿児島大学に対して、これまでのご経験から貴重なお話、メッセージをいただければと思っております。

はじめに、稲盛名誉会長の学生時代のお話をお聞かせいただければと思います。改めて、ご入学年度は。

稲盛 私が入学したのは、昭和26年です。

前田 私が小学校に入る一年前です。ね。終戦直後のその時代は本当に物のない時代で、裸足で学校に通っている子供達もいたことを記憶しています。鹿児島大学も発足したばかりで、実験器具もほとんどない中で、どういう形で研究をされたのか、想像もつかないのですが。

稲盛 当時、鹿児島大学は、伊敷の軍隊の兵舎跡が校舎でした。私は、甲突川のほとりにある薬師町に家がありましたので、そこから毎日下駄履きで伊敷まで通って

ました。

今にも壊れそうな兵舎跡で授業があったのですが、実験室だけは新しく作ったものがありました。そこは、通り一遍の分析とか実験とかできるくらいに部屋で、実験器具もありました。覚えているのは久保田温郎という旧七高の化学の先生がおられたことです。豊饒とよじょうとした厳しい先生で、横着な我々学生連中がそこで実験をするのですが、ビーカーやピペットを壊すなど、よく粗相をして先生に怒られていました。実験をしている時に先生が来られると「その物質はなんだ」と聞かれる。でも、実験で化学反応によってできる物質が分からなくて、答えられないわけです。ですから、先生が来られると実験中の物質を全部捨てるということをしていました。質問されないように。そういう横着な学生がいっぱいいました。時には、その実験室の近くの学生食堂へ行って、ふかした芋などを買って食べたりしていました。

大学時代は、基礎的な化学分析などを



教わったくらいで、新しいことは別にありませんでした。その中で、何にもなくても一途に一生懸命、目の前にあることに対して努力を続けていくという、そういう精神だけは教わった気がします。

前田 そういいう大学時代を過ごされたのですね。ご卒業後は。

稲盛 そういう、何もない中で大学を卒業して就職することになったのですが、大学を出たからといって良い会社に採用されるはずもなく、石油化学の会社などをいくつか受けましたが、採ってもらえませんでした。そこで、応用化学の竹下寿雄先生の知り合いの方がおられた京都の松風工業という絶縁用碍子を作っている会社を紹介さ

れて、そこに採ってもらいました。碍子ですから、無機化学の分野です。私は有機化学が好きで、当時、竹下先生が担当されていた有機化学を学んでいたのですが、就職が決まったものから、急遽、無機化学の島田欣二先生の方に移って粘土の研究を始めました。半年しかない残された時間で、無機化学の卒業論文を書きました。先生は大変お酒が好きで、実験が終わると先生の部屋で、焼酎がなければジュースをアルコールで割って飲んでいました。先生は鴨池に住んでおられたので、帰り道、伊敷から肩を組み、七高の校歌などを歌ったりして。忘れもしませんが、ちょうど高見馬場の停留所辺りの線路の上で、市電が来るのに肩を組んで踊り出して、怒られました。そんな大学時代でした。しかし、何もない中で一生懸命目の前のことに努力をしていくというのを教わった気がします。

先程、言いましたように、竹下先生の紹介で、碍子を作っている松風工業に入ったのですけれども、何もない研究室でした。碍子では将来性がありませんので、新しいエレクトロニクス用の絶縁材料を開発しようということで、日本で初めて私がフォスフェイトとい

うファイレンセラミック材料の合成に成功して、それをもとにいろいろな製品を作りました。そのことで松風工業の研究室は大変発展しました。当時、松下さん（松下電子工業）がオランダのフィリップス社と技術提携して、初めてテレビを作り始めたんです。テレビの電子銃の絶縁をする部品が必要ですので、フィリップス社から輸入しておられたのですが、いつまでも輸入というわけにはいかないとい



うファイレンセラミック材料の合成に成功して、それをもとにいろいろな製品を作りました。そのことで松風工業の研究室は大変発展しました。当時、松下さん（松下電子工業）がオランダのフィリップス社と技術提携して、初めてテレビを作り始めたんです。テレビの電子銃の絶縁をする部品が必要ですので、フィリップス社から輸入しておられたのですが、いつまでも輸入というわけにはいかないとい

うことで依頼がありまして、私が合成に成功したフラインセラムミック材料を用いて、独力で開発し、納品しました。松下さんに大変喜んでいただいたことが記憶にあります。

前田 稲盛名誉会長は、いろいろなご書物の中に「六つの精進」を書いておられまして、私も日々その言葉を心に刻みながら生活しております。中でも最初に「誰にも負けない努力をする」ということが書かれていまして、いま伺った、大学時代、そして職業を決めてからのご活躍には、その言葉通りの歩みが表れていると思います。鹿児島大学の学生に対しても、そのような思いを伝える教育をして参りたいと私たちも思っています。

稲盛 鹿児島大学は、日本の南の端にある大学です。そういう意味で、決して大学の中では有名な大学ではないかもしれませんが、ここで学んでいる学生の皆さんが、現在担当しているものに対して必死で努力するということを継続していけば、必ず人が考えられないよ

うな素晴らしいことができる、と私は信じています。私自身は、今ある目の前の目標に向かって必死で努力をしました。何が得られる、得られない、ではなく、目標に向かって命がけで努力を続けるということが一番大事だと思います。その結果、京セラという会社をこの京都に作ることができました。同時に、電気通信事業の自由化に際して、全く通信事業には門外漢であった、そんな私がNTT独占の牙城に食い込んで、消費者の皆さんのために安価な通信料金でサービスの提供したいという一念から、必死で第二電電（現KDDI）を作り上げました。何と云っても、必死に、目標に向かって命がけで努力を続けるということ。すぐに成果は出なくても、一生懸命やっていたら、必ず成果は出るものと私は今でも信じております。

前田 昨年3月、鹿児島大学郡元キャンパスの進取の気風広場に稲盛名誉会長の銅像を作らせていただきましたが、その銅像の台座にも、その精神に通じるお言葉をいただいています。「どんな境遇に遭遇しようとも、どれほど厳しい環境に置かれようとも、くじけるこ



となく、常に明るい希望を持ち、地道な努力を一步一歩続けていくならば、自分が思い描いた夢は必ず実現する」。これは学生や私たちへの素晴らしいメッセージです。

留学生にもこの思いが伝わるように英語でも書いており、鹿児島大学の教育の大きな柱になっていきます。大変ありがたく思っています。

鹿児島大学では、現在の社会情勢の中で地方創生の一端を担っていることから、グローバルな視点を持ちながら、なおかつ地域社会の発展に貢献する人材を育成するということを教育の柱に据えています。そこで、一人でも多くの学生に、海外で学ぶ体験を持たせていきたいと考えています。海外へ出て、広い視野の中で生活を体験し、そこから日本を眺めてみることで、一人ひとりの学生の考え方の広がりが変わってくるのが期待されるからです。今年の6月には、ロンドンのUCLと鹿児島大学が協定を締結して、UCL稲盛留学生制度（UCLに来年度から留学生を派遣するプログラム）がスタートします。このようなご支援をいただいたことに、心から御礼申し上げます。稲盛名誉会長に続くような、志を持った若者が鹿児島大学から出る、そういう夢を描

いて学生を送り出したいと思っています。これからのグローバル人材という点に関して、お考えをお聞かせいただけたらと思います。

稲盛 グローバル人材という特別なものは存在しないわけで、自分が立てた目標、目の前にある目標、それに対して必死に努力を続けるということとは、国内にいうと、グローバルな展開をしようと一番大事なことだと思っています。私の場合も、国内で半導体のパッケージ開発を一生懸命やっていたころに、半導体の発祥の地であるアメリカ・カリフォルニアにある半導体メーカーが、私の作った製品を使って半導体を製造し始めたということがありました。インテルやモトローラといった、素晴らしい半導体メーカーのトップとも、そのような開発を通じて大変親しくなり、頻りにアメリカ・カリフォルニアのサンノゼやサンフランシスコのベイエリアなどへ行き、技術打ち合わせや交渉などを行っていました。必ず道は開けていきますから、やはり一つの物事に一生懸命頑張るって取り組んでほしいと思います。

前田 今、鹿児島大学では世界に視野を向けるということと、地域産





スチヨンをいただければありがたいと思いません。

稲盛 サジエスチヨンと呼べる意見の持ち合わせもございませんが、確かに、地方にある大学であるだけに、グローバルな中でまず地域に対しても貢献していかなきやならないと思います。それは大事なことではありますけれども、やはり学生諸君には、視野を広げて世界を見て、世界に雄飛していく中で、ローカルな応用ができると思いますので、まず鹿児島大学から多くの学生が世界へ飛び出して行ってほしい。世界を見据えて、そういう視野を身につけて、それを糧として地方の活性化にも向かってほしいという気がします。

業への貢献ということも一つの柱に置いてあります。人口減少や少子化によって地域の産業が衰退しているということもあり、地域課題への取り組みに対して何かサジエ

前田 現在、鹿児島大学では、社会人に対する教育にも力を入れています。例えば、鹿児島は焼酎の産

地ですけれども、焼酎の製造についての知識のほか文化的背景、健康への関わりなど、焼酎に関する教育を背景に「焼酎マイスター」という人材を養成する社会人教育プログラムです。それから、本学には農学部がありますので、森林を保護する人材養成プログラム。稲盛アカデミーでは、鹿児島島の企業人を対象として、稲盛経営哲学に関するプログラムも行っています。そのほか、食品の安全性を確保する人材養成にも着手しました。現在、社会人を対象としたこの4つのプログラムを走らせ、正規の学生の授業以外に地域の社会人への教育を行っているところです。本学としては、総合大学の強みを生かして、この幅を広げていきたいと思っています。その辺りも含めまして、魅力ある教育や産学連携、社会人教育等について、これからの鹿児島大学に期待するお言葉をいただきました。

稲盛 地方大学である鹿児島大学であつても、おそらく一般の市民にとつては敷居の高い学校ではなからうかと思えます。学生だけではなく、地域の人たちが大変親しみを感じるような、足を運びたくなるような大学といえますか、日本

の大学の中でも、突出して、市民の方々に親しまれる大学であつてほしいです。そのためには、大学が市民を受け入れるような、いろいろな企画や催しをやつていかなければいけないと思えます。先生方も地域の方々に親しく接してくれる、そういう大学を目指していただければと思います。できれば市民が心からの愛着を感じるような大学であつてほしいと思えます。

前田 市民の皆様を対象にした教育プログラムを、大学としても拡張していきたいと思えます。今は、どちらかというと産業ベースのプログラムが多いのですが、もっと教育とか法律とか身近な分野についても広がっていければと思つているところです。

鹿児島大学には9学部と10研究科があり、そこに素晴らしい研究者、教育者、また、企画力の優れた事務職員がおりますので、それらスタッフを市民の皆様にご利用できるような大学の運用ができたらと思えます。

稲盛 そうですね。そうしていただけたらなによりです。

前田 幸いに大学のキャンパスは鹿

鹿児島市の住宅地のご真ん中にありまして、植物園もあり、田んぼや畑もあります。季節ごとに見事な色彩を創り出す銀杏並木や椰子の並木など、素晴らしい景観もあります。キャンパス全体を学生だけではなく市民の皆様にも楽しんでいただけたらいいな工夫をしたいと思っています。現在でも図書館や博物館その他の施設を市民の皆様開放しておりますので、大変よく活用していただいています。

来年の秋頃には、このたびご寄贈いただきました稲盛記念館が完成する見込みです。京都賞関連の展示室や福利厚生施設も設けられる予定です。そういう所に市民の方が足を運んでくれるような、より親しみやすいキャンパスを創りたいと思っています。稲盛名誉会長には、いろいろご指導いただければと思います。

稲盛 私もなにか力になればと思います。

前田 大学も法人化され、文部科学省の交付金が減る中で、私どももいたしましたが、自己資金、あるいは外部資金をどう獲得するかというところで模索しているところです。これからの、いろいろな

手段でもって自分たちで教育資金あるいは研究資金を作り出す努力をしなければいけないと思っております。その一つとして、『進取の精神』支援基金というものをご4年前ほど前に立ち上げて、稲盛名誉会長にもその旗振り役を務めていただきましたが、お陰さまで、地域の企業の皆様にも鹿児島大学へのご理解をいただき、毎年5千万円近い資金をいただいております。そのいただいた資金で学生たちへの教育をしっかりと進めていきたいと思っています。現在、300名近い学生を毎年アジアやアメリカ、ヨーロッパなどの海外へ送り出すことができています。それにつきましては、稲盛名誉会長にも大変大きなご支援をいただいておりますことを感謝申し上げます。

それから、毎年、京都賞受賞者の講演会を鹿児島で開催していただき、鹿児島の若者たちが大変大きな刺激を受けています。その中で、2年前から稲盛名誉会長のご支援のもとで、離島の高校生たちにも、京都賞受賞者の講演を聴く機会を与えていただき大変嬉しく、私どもも大きな力をいただいております。

稲盛 私は、鹿児島大学の今後の展開のために必要とあれば協力は惜しみません。母校の鹿児島大学が、他の大学に遜色のない素晴らしい大学に発展し、そこで学ぶ学生たちが鹿児島大学に誇りをもって勉強できるような環境を作りたいと思います。

前田 ありがとうございます。一昨



稲盛 和夫 (いなもり かずお) 京セラ名誉会長

- 1955年 3月 鹿児島大学工学部応用化学科卒業
- 1959年 4月 京都セラミック株式会社 (現京セラ) を設立
- 1984年 第二電電株式会社 (現 KDDI) を設立
- 1985年 第一回京都賞授賞式挙行
- 2005年 鹿児島大学に稲盛経営技術アカデミー (現稲盛アカデミー) を設立
- 2015年11月 鹿児島県から県民栄誉表彰授与
- 2015年11月 鹿児島市から市民栄誉賞授与

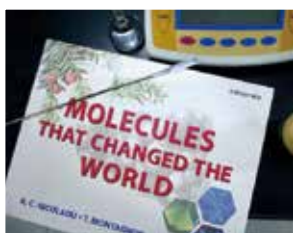


前田 芳實 (まえだ よしざね) 鹿児島大学長

- 1969年 3月 鹿児島大学大学院農学研究科修士 (1977年3月 農学博士取得 (九州大学)) 鹿児島大学助手農学部
- 1994年 7月 鹿児島大学教授農学部 (~2009年3月)
- 2009年 4月 国立大学法人鹿児島大学理事 (~2013年3月)
- 2013年 4月 国立大学法人鹿児島大学長 (~現在)

年、鹿児島大学へ来ていただき、ご講演いただいた際の学生たちと稲盛名誉会長とのやりとりがこのご本(『活きる力』)に記載されています。本学における人間教育の指針として大切にさせていただきま

潜入ルポ
～学びの部屋～
身の回りにある化学物質から覗く
有機化学の世界
Lecture of the University



「世界を変えた有機分子」(共通教育科目)

総合科学域総合研究学系 研究推進機構
研究支援センター 機器分析施設 准教授

澤田剛 先生

今年度新たにスタートした共通教育科目「世界を変えた有機分子」は、薬剤や香料など身近に存在する化学物質について分子レベルでアプローチし、その研究の歴史、化学者の足跡などについて学ぶ講座だ。「推理小説の毒」「海洋生物の毒」「世界一辛い物質」「バンコマイシンと抗生物質」……シラバスに並ぶ、世界を変えた「毒」や「薬」など興味深いラインナップに惹かれ、講義室を覗いてみた。

紀元前15世紀のエジプト人も頭痛に悩まされていた

授業前半のテーマは、アスピリンについて。「古代エジプトで書かれた医学パピルスに、ヤナギの樹皮を潰したり、煮たりすることで痛み止めの薬を作っていた記載があるそうです。アスピリンの前の構造物であるサリシンが初めて文献に出た例です」。有機化学の歴史が、澤田先生によってひもとかれてゆく。古くから、エジプトのほか中国や南米、ギリシャなど世界の国々でヤナギの樹皮が鎮痛剤として用いられ、医学の父と言われるヒポクラテスによる記録も残されている。さらに19世紀に

入ると、ドイツの化学者ブフナーによってヤナギの樹皮からサリシンが単離され、イタリアのピリア、フランスのジェラルド、ドイツのコレベなど各国の化学者による画期的な研究成果を経て、サリチル酸の工業的合成が実現。そして1919年、ドイツの化学者ホフマンによって純粋なアセチルサリチル酸、いわゆるアスピリン(商品名)の合成が実現し、世界中に出回るようになった。分子構造式の解説に研究者のエピソードや時代背景を織り交ぜた化学史の話や聞きうちに知らず知らず化学の世界に引き込まれていく。二人の研究者が1から10までパッと全合成を行うという話はありません。なぜなら、一つの新しい反応を見つけただけでも大変だからです。一つの薬は、何世紀にもわたる諸国の化学者の研究のりレーによってようやく生み出されるものであることを澤田先生は語る。

現代のくらしの隅々に有機化学の恩恵

有機化合物は、炭素を含む化合物のこと。生物を由来とする石油、食物、木材などのほか、石油などの合成によ

て作られるプラスチック、合成繊維、塗料、香料なども人工の有機化合物だ。現代ではテレビやパソコンの液晶材料としても使われている。近年では、新しい機能を持つ有機化合物の開発も進められ、合成の過程において有害な廃棄物を排出しない方法や石油に依存しない方法の開発なども求められている。

アスピリンに関して言えば、20世紀後半にはヒトの体の痛みや炎症に対する薬の作用様式についての説明が進められ、顕著な研究成果を挙げたイギリスの薬理学者ヘーラは1982年、ノーベル医学生理学賞を受賞。現在もなお、糖尿病やがんの試薬としてアスピリンの研究は進められているという。

有機化学の世界へ誘うあの手この手

「理系の学生は、いずれ本格的な理論を学びますが、その時に、化学の背景に紆余曲折があったことを知っておくと、無機的な反応式についても面白く学べるのではないかと」。講義の狙いにつ

いて澤田先生は語る。分子式や構造式の詳しい解説を話に挿入するのは「内容が簡単すぎると、高校時代と変わらない」と学生を退屈させてしまう。だから、あえてちよつとだけ難しいところを狙って、引っかけりを作ることを意識しています。講義冒頭では前週にとったアンケート結果への回答を行い、テーマの終わりにクイズ形式の小レポートを実施する。講義前半と後半の間には3分の休憩を挟む。いずれも、学生の注意を集中させるという澤田先生の意図が込められている。受講していた学生に感想を尋ねると「歴史的背景を知るのが面白い。化学が苦手でも、とっつきやすい授業(理学部・女子)」「毒物に興味がある。この先の授業も楽しみ(工学部・女子)」との声が続々返ってきた。澤田先生による有機化学への誘いは、じわじわ効きつつある。

Profile



澤田 剛 (さわだ・つよし) 准教授

鹿児島大学 総合科学域総合研究学系 研究推進機構
研究支援センター 機器分析施設

[学位] 博士(工学)九州大学
[所属学会] アメリカ化学会、高分子学会、有機合成化学協会、日本化学会
[専門分野] 合成化学、有機構造化学、分析化学
[研究テーマ] ①光応用性を有する機能性色素
②円偏光発光材料 ③光触媒科学



東芝ラグビーチーム プレイブルーパス選手

中尾 隼太(なかお はやた)

長崎県出身。2017年鹿児島大学教育学部保健体育卒業。2017年4月東芝ラグビーチーム「プレイブルーパス」入団。



強豪校に比べると決して恵まれた環境とは言えなかったけれども、
自分なりに積み重ねた努力が、今いる場所へと導いてくれました。

名

門ラグビーチーム「東芝ブレイブルーパス」

で、チームの司令塔といわれるポジション、スタンドオフを務める花形選手の中尾隼太さん。長崎北陽台高校時代には2度の花園出場を果たし、大学時代にはキャプテンとしてチームを牽引。全国地区対抗大学ラグビー大会準優勝2回、鹿児島県7人制大会優勝などの好成績をチームにもたらした。

「鹿児島に住み始めた頃は、空から降ってくる桜島の灰に驚愕しました」。ラグビー戦の勇猛なイメージとはかけ離れた穏やかな表情で、中尾さんは一つ一つの言葉を丁寧に紡ぐ。受験時は関東のラグビー強豪校を第一志望にしていたが、試験の結果から第二志望の鹿大への進学を決意。「浪人して強豪校を狙う道も考えましたが、もともと教員を目指していたので、教員免許を取得することを最優先に考えて、兄も学んだ鹿児島大学を選びました」

学生時代のラグビー部の活動は、コーチがいなかったため学生自身で考えて練習に取り組む、運営にあたった。自主性や協調性を発揮しつつチームがまとまっていくという一面もあったが、ラグビーに関しては中尾さんの目指すレベルからは程遠いものだった。「ラグビー」筋という環境ではまったくなく、チームメイトは学業を中心に行っている人もいれば、アルバイトに忙しい人も。その中で、周りのことを言い訳にせず、今ある環境で自分にできることを一生懸命やっていたと思います」。将来、教職についたとき役立つようにと、積極的にコーチの研修会に参加し、レフェリーの資格も取得した。「県ラグビー協会の方々にもお世話になって、いろいろな試合に出向き、(レフェリー資格取得に向けて)実践も積みましました。どこにいても、探せば勉強の機会はたくさんあります」。そんな中尾さんの情熱はチームにも伝染していつ

た。「だんだんラグビー部の雰囲気も成績もよくなっていきまし、その時の努力が、自分が今いるここにつながったのだと思います」。4年生の春に出場した九州学生選抜試合での活躍が関係者の目に留まり、国際大会男子セブンズ日本代表に選ばれ、ドバイ、南アフリカ等での国際試合に出場。卒業と同時に東芝ブレイブルーパスに入団した。

後輩へのメッセージを尋ねると「時間を自由に与えられているのが大学時代。その時間をどう使うかというのも本人の裁量に任されていますが、将来の目標、スペシャリストを目指して挑戦するという時間を自分は過ごしてきました」という答えが返ってきた。社会人トップチームに入った今も、空いた時間にはラグビーのほか英語を学び始めたという中尾さん。「置かれたところで咲きなさい」という座右の銘を胸に、さらなる高みを目指し歩み続けている。



研究室から



SCHOLAR
INTERVIEW

濁りも泥も、多種多様な生物を育む「命のゆりかご」

～ありのままの奄美の海を、まるごと探究する海洋生物学者～

固有の伝統文化やライフスタイルを今なお保持し、生物の多様性に富む奄美群島は、学術的にも貴重な資源を秘めた地域。本学では、奄美市に国際島嶼教育研究センターを設置し、奄美群島の多様性維持機構の解明と保全へ向けた研究・教育活動に取り組んでいる。センターを拠点として海の生き物を探究する藤井琢磨先生の活動について伺った。

誰もが目にする無名の
生き物に名前を付ける

藤井先生の元来の研究テーマは「スナギンチャク類の分類と進化系統」。スナギンチャク類とは「サンゴ類ともイソギンチャク類とも違う、その間の生き物」。スナギンチャク類は自分で作り出したクローンが繋がって群体をなし、互いに養分をやりとりして生きる。骨を作らない代わりに環境の中から砂を取り込み、それを骨のように振る舞う生き物だ。

「最初は、名前のない生き物だと紹介されて。人が知らないものの特徴を調べて名前をつけるのが分類ですが、最初の仕事がスナギンチャク類の分類でした」。骨を作るサンゴ類とも、骨を作らず移動能力を持つイソギンチャク類とも違う生き物について、藤井先生は琉球大学在学中から調査、研究してきた。潮間帯から深海まで生息し、とくにサンゴ礁域であればどこにでも見られるため、海に潜って泳ぐ人ならたいがい目になっている生き物だ。だが、きちんと調べられたことが

なく、名付けられていない種が多く残されていたのだという。

海をまるごとを理解したい

イソギンチャク類、サンゴ類、スナギンチャク類それぞれの定義はあるものの、研究を進めるにつれ、それぞれの遺伝子の進化の道筋が曖昧だということに気づいた、と藤井先生。「色でも赤と黄の間の色、といつても黄色に近いものもあれば赤に近い色もある。それと似ていて、人間が思っているほどきちんと分けることができない」。スナギンチャク類に絞って調べてもわからないことが多く、次第に隣り合う分類群を理解する必要性に迫られた。研究の範囲は徐々に広がり、目下の研究テーマは、スナギンチャク類を含む六放サンゴ類がサンゴ礁域でいかに多様に進化してきたか、という広範囲なものへとシフトした。

まだ研究者が少ない分野とあって、海に潜って標本を採取することも大切な仕事の一つ。「温暖な海、サンゴ礁域にはい

Scholar Interview



撮影：昴康輝 (JAMSTEC)



藤井 琢磨 特任助教

総合科学域総合研究学系 研究推進機構
国際島嶼教育研究センター 奄美分室 博士(理学)

Profile 藤井 琢磨 (ふじい たくま)

琉球大学 理工学研究科 博士前期課程 海洋自然科学専攻 2011年03月修了
琉球大学 理工学研究科 博士後期課程 海洋環境学専攻 2014年03月修了

■所属学会: 日本サンゴ礁学会、日本刺胞有櫛動物研究談話会、日本動物分類学会、国際サンゴ礁学会、日本動物学会、沖縄生物学会

■専門分野: 分子系統学、動物分類学

■研究テーマ: ○スナギンチャク目およびイソギンチャク目の進化系統の解明○サンゴ礁域における底性無脊椎動物の多様性

ろんな生き物がたくさんいる。とくに内湾の砂地、泥池、濁った環境には変わった姿形、生き方の生き物がいっぱい棲んでいて、興味は広がるばかりです」。2016年に発見したニゲミズチンアナゴやダルマスナギンチャクの一種など、別の調査の最中に偶然発見し、記載につながった事例も数多い。「研究対象を絞って追い求める方も多いですが、僕は包括的に自然のあり方を全部理解したい。その視点が未記載種の発見につながっているのだと思います」

ありのままの奄美の海を知ってほしい

海の研究者として、広く知ってほしいことがあるという。「大島海峡も笠利湾も奄美を代表する海ですが、濁っていて汚い、と言われることがあります。自然が残された海域は陸域と繋がっており、山から栄養を含む表土等が流れ込むことによつて、もともと濁っている状態の場所がある。そして、そこにしか生息しない生き物がいるのです」。2017年には

西表島にしか生息しないとされていた希少種のアミトリセンベイサンゴを大島海峡で発見。学会誌に発表した。「奄美大島内湾、とくに大島海峡はそれだけ貴重な場所なので、学術的にも社会的にも正当な評価を受けていないと感じます」。澄んでいてきれい、という一般的な価値観だけではなく、ありのままの海の状態を、偏見のない目で見てほしい、という。環境保護を訴えることはもちろん大切だが、それ以前に本来あるべき姿を知らなければ保全も開発も語ることができない。貴重な資源が失われる前に記録し、保全に役立てたい、と科学者としての使命を藤井先生は語る。

センターでは地域で科学教室を開き、水族館に標本を展示するなど、地域での教育活動にも力を入れる。「新しいものを発見した時、共感し語り合える仲間の輪が地元が増えてほしいという個人的な願いもあります」。海へ向ける藤井先生の温かい眼差しは、同じように地域へも向けられている。

研究室から



SCHOLAR
INTERVIEW



「農」で再現する150年前の絆。「薩長同盟酒プロジェクト」

～150年の時を超え、新たなつながりから生まれた恵みの一滴

明治維新から150年の節目を機に山口市と鹿児島市はヒト・モノの交流を通じた地方創生プロジェクトを始動。取り組みの一つである「薩長同盟酒プロジェクト」では、山口大学と本学の農学部が連携協力。2017年春、原材料となる米、芋の栽培から始まる双方オリジナルの酒づくりがスタートした。本学のプロジェクトリーダーを務めた下田代智英先生に「農」を通じた平成版薩長同盟のストーリーを伺った。

史実に着想を得た初の試み

「薩長同盟酒プロジェクト」は、明治維新前夜、武器の代金として長州から薩摩へ米が送られたという史実にちなみ、企画されたもの。「今回は逆に、鹿児島産の米を山口へ運んで日本酒を造ろう、という発想が事の発端です」。維新から150年を経た今、鹿児島における酒米栽培の技術確立に向け、山口大学と鹿児島大学による画期的な技術協力が実現。同時に、鹿児島の酒づくりプロジェクトとして、鹿児島市、JAいぶすき等の協力のもと本学オリジナルの焼酎づくりが企画された。

日本酒用に栽培した酒米の品種は山田錦。酒づくりには好適米の代表格だが、とくに暖地では実の肥育が難しく、茎の高さから台風等によって倒れやすいという弱点もある。施肥を減らし、管理を密にするなど、プロジェクトチームは暖地における酒米栽培の可能性を試行錯誤。鹿児島市生見地区の圃場で酒米栽培にチャ

レンジした。初年度は出穂後3回の台風に見舞われたものの、秋には特等米930kgの収穫にこぎつけた。

一方、焼酎の原料となるサツマイモは指宿市の圃場で学生が栽培し、おおよそ1トンのコガネセンガンを収穫した。圃場の一部には下田代研で開発中の新技術が使われている。

このプロジェクトでは、かつて英国留学を果たした薩摩スチューデントと長州ファイブがイギリスで交流したという史実にならない、地域を舞台に二つの大学が交流するというスタイルの活動が進められた。米や芋の植え付け、収穫作業には毎回、双方の大学から学生や教員が参画。田植えや収穫には地域の人や地元の小中学生も集まった。「小学生や地域の人たちと一緒に楽しむことができました」。農学部農業生産科学科3年生の佐々木香菜子さんは振り返る。

イベント行事を超える、豊かな収穫

「最初は、明治維新150年記念として立ち上げた事業



Scholar Interview

下田代 智英 准教授

農学部 農業生産科学科
作物生産学 博士(農学)

Profile 下田代 智英(しもたしろ・ともひで)
鳥取大学大学院農学研究科修士課程1995年3月修了
鳥取大学大学院連合農学研究科博士課程1999年3月修了
■所属学会:日本農業生産技術管理学会、日本作物学会
■専門分野:作物学
■研究テーマ:○環境条件に対する根系の可塑性について○根系の計測法と評価法について○西南暖地の水稲の生産性と根系について○カンショの育苗法が品質と収量に与える影響について

でしたが、研究成果と教育効果、そして地域との交流も深められ、JAいぶすきとの共同研究もスタートしました。大学の使命に沿った総合的プロジェクトになったのではないかと感じています。酒プロジェクトを通じて、大きな収穫が得られたことを下田代先生は語る。なかでも学生の学びと成長には目を見張るものがあったという。「日曜のたびに圃場に通って忙しいと思いますが、みんなよく頑張っています」。作物づくりと並行して製品化に向け、銘柄やラベルデザインの公募、選定などについても学生がチームを組んで主体的に進めた。「面白かったのは、銘柄やデザインに関して教員と学生の感覚が見事に違っていたこと。幅広い年代の意見を集約し、話し合いによって意見をすり合わせていく学生たちの姿に成長を見ました」。さまざまな角度から検討を重ね、工学部3年の郷原稜海さん考案の「薩摩熱徒」と命名。ラベルには農学部4年氏原悠香里さんの作品が採用された。

飲んで支援!

立ち上げから約1年半の取り組みを経て2018年7月、焼酎「薩摩熱徒」が世にデビュー。「瓶詰めされた製品を手にして、自分たちがつくったんだなという達成感がようやく湧いてきました。濃くフルーティーな味わいが印象的でした」。佐々木さんは振り返る。「学内外の多くの方々のお陰でここまで来られました。この先も継続していきたい」と、下田代先生は語る。本誌が発行される頃、2回目の仕込みを迎える「薩摩熱徒」。来年度以降の継続は、製品の売れ行きにかかっているというから、愛飲家の方は飲んでご支援のほどを。2018年製は本学インフォメーションセンターにても販売中(在庫限り)。2019年製(春頃発売予定)は予約購入も可能だ。

お問い合わせ・ご予約

〈専用メールアドレス〉

satsunetneto@gmail.com

鹿児島大学農学部農業生産科学科

准教授 下田代 智英





鹿大と琉大 産学連携活動に関する協力推進協定締結

8月31日、鹿児島大学南九州・南西諸島域共創機構は、国立大学法人琉球大学地域連携推進機構との「産学連携の協力推進に関する協定」を締結しました。

本協定は、両機構が有する資源やネットワークを共有、活用することで相互の地域社会（特に南西諸島域）に研究成果を効果的に還元し、地域社会の発展や地域産業の振興に寄与することを目的としています。琉球大学本部で行われた締結式では、高松英夫南九州・南西諸島域共創機構長（理事・副学長（研究担当））と須加原 一博琉球大学地域連携推進機構長（理事・副学長（地域連携・地域医療・キャンパス移転担当））による協定書への調印が執り行われました。

挨拶の中で、須加原機構長は「両大学の資源を活用し、相互補完しながら地域産業の活性化に貢献したい」と連携に対する期待を述べ、高松機構長は、「共通の地域（フィールド）である南西諸島域の地域イノベーションの創出による地方創生に寄与していきたい」と今回の協定締結に際しての抱負を述べました。

両機構は、今回新たに構築した鹿児島大学・琉球大学 研究シーズ／特許情報Web検索システム「SearchKURU（サーチクル）」（※）の運用を皮切りに、今後連携協働して南西諸島域における産学連携活動を推進していく予定です。

また、南九州・南西諸島域共創機構は、今回の連携協定締結を機に、今年度から取り組んでいる「南九州・南西諸島域の地域課題に応える研究成果の展開とそれを活用した社会実装による地方創生推進事業」（文部科学省による運営費交付金等による重点支援）の更なる推進を図ることとしています。

※「SearchKURU（サーチクル）」 <http://www.rdc.kagoshima-u.ac.jp/searchkuru/>



稲盛記念館寄附受納式を開催

鹿児島大学は、本学工学部の卒業生で鹿児島大学名誉博士（京セラ株式会社名誉会長）である稲盛和夫氏から、本学の教育研究の充実・発展の場として、「稲盛記念館」をご寄附頂くこととなり、9月7日に寄附受納式を執り行いました。

寄附受納式では、稲盛名誉博士から、前田芳實学長へ目録が贈呈されました。

続いて前田学長より、「『稲盛記念館』は、学生や教職員が日常的に集い、稲盛和夫名誉博士の歩みや哲学等に触れあい、コミュニケーションを図る場として、また、地域・産業界・国内外の研究者などとの交流促進のためのおもてなしの場として、有意義に活用させていただきたいと考えております。そして、博士の魂を継承した世界をリードする人材が育ち、地域・産業界等との連携がさらに強化され、本学のますますの発展につながるものと確信しております。」と稲盛名誉博士への謝辞が述べられました。

稲盛名誉博士からは、「何事も一所懸命、一心不乱に努力をすればできないものはないという教を鹿児島大学で教わりました。どうぞ、今後大学関係者の皆さんが努力をされ、若い学生諸君が立派な社会人として成長されるよう教育指導を行っていただければと思います。」と激励のメッセージをいただきました。

稲盛記念館は、本学郡元キャンパス学習交流プラザ前に建設予定で、10月に着工、翌年10月に竣工予定です。稲盛名誉博士の歩みや哲学等にふれあうことのできる「稲盛ライブラリー」や「京都賞ライブラリー」を配する計画です。



鹿児島大学司法政策教育研究センターと早稲田大学法科大学院が研究教育連携に関する協定を締結

8月2日、鹿児島大学司法政策教育研究センターは早稲田大学大学院法務研究科（法科大学院）と、教育研究連携に関する協定を締結しました。

総合教育研究棟3階のセミナー室において執り行われた調印式では、高松英夫理事から、「鹿児島大学として、南九州から法曹になるという道を充実させるとともに、地域に理解のある法曹を一人でも多く生み出そうという取り組みを行っているところ、このたびの協定の締結に至ったことは極めて有意義です。」と挨拶がありました。

米田憲市センター長と甲斐克則研究科長による協定書への署名に続いて、甲斐研究科長から「早稲田大学法科大学院の取組の柱のひとつでもある、地域を支える法曹を生み出すことへの推進に協力関係ができることは、今後の司法制度を改善する上でも重要。腰を据えた継続的な取組としたい」と挨拶があり、続いて米田センター長から「南九州の法曹志願者への支援の充実に協力いただくことに加え、当センターで取り組んできた離島等司法過疎地における法律相談やICTを駆使した取組を活用いただくことで、早稲田大学法科大学院の取組や、地域の法律系士業のみなさんにもこの恩恵を広げたい」との抱負が述べられました。

取組の内容を定めた覚書では、早稲田大学法科大学院の教員が鹿児島大学において、法曹志願者を対象とした法科大学院形式の模擬授業を2回実施するほか、司法政策教育研究センターが取り組む、離島等司法過疎地における法律相談事業に早稲田大学法科大学院の学生や出身法曹を受け入れることや、司法政策教育研究センターが有するICTのノウハウを駆使した取組を実施することとしています。





伊佐市と包括連携協定を締結

鹿児島大学と伊佐市は、7月6日に包括連携協定を締結しました。本協定は、それぞれの有する資源や機能等の活用を図りながら、幅広い分野で相互に協力し、地域社会の発展と人材の育成に寄与することを目的としたもので、鹿児島大学が「地域活性化の中核的拠点」を目指して地域との連携を強化する取組の一環です。

伊佐市役所大口庁舎において執り行われた調印式では、前田芳實学長と隈元新伊佐市長による協定書への署名に続いて、隈元市長が「合併10年を経過し、急速な人口減少・少子高齢化や地域経済の衰退などの様々な地域課題を解決していく上で、鹿児島大学の有する資源を活用させていただき、将来的なまちづくりを進めていきたい」と挨拶。続いて前田学長から、「今回の協定締結を機に、米をはじめとする農産物や豊かな文化歴史など魅力あふれる伊佐市との連携協働を強化し、『地域活性化の中核的拠点』を目指す大学として積極的に地域社会の発展に貢献したい」と抱負が述べられました。

鹿児島大学と県内自治体との連携協定締結は、本協定で9件目。現在、伊佐市新庁舎建設検討会への教員の参画や、先般の霧島連山えびの高原硫黄山噴火に伴う川内川の水質問題対策ワーキング・グループ(農学部及び水産学部教員で構成)設置などを通じ、学術的な観点からの助言等をさせていただいております。



公益財団法人米盛誠心育成会研究助成目録贈呈式を開催

7月18日、平成30年度公益財団法人米盛誠心育成会研究助成目録贈呈式が鹿児島大学で行われました。

同研究助成は、鹿児島県の資源、風土に立脚した基礎的・学術的に優秀な研究に対し、公益財団法人米盛誠心育成会から研究助成金が贈られるものです。今年度は、新規5件、継続5件の研究が選考されました。

贈呈式では、米盛庄一郎米盛誠心育成会理事長から研究者へ目録が贈呈され、「研究助成金としては少額ですが、鹿児島大学など地元研究機関の方々の支援ができますことを、大きな喜びとしております。当財団の支援が呼び水となり、さらに国レベルの支援に結びつくことを願うものであります。」と挨拶がありました。

続いて、前田芳實学長から、「平成4年からの長年にわたるご支援に心より感謝します。今回、助成対象となった研究テーマは、地域社会と密接に関連するものであり、鹿児島県の産業の発展や地域社会の課題解決に大いに貢献するものと期待されます。米盛誠心育成会の皆様方には今後ともご指導、ご支援を賜りますようお願いいたします。」と謝辞が述べられました。



前田芳實学長一行がブラジルを訪問

7月19日～7月25日、前田芳實学長、高松英夫研究担当理事らは、鹿児島県及び関係機関のメンバーとともにブラジルを訪問しました。この訪伯は、ブラジル鹿児島県人会創立105周年記念式典及びブラジル日本移民110周年記念式典への参加を目的としたものです。

ブラジル・サンパウロ市への到着は7月20日。一行は、市内イビラプエラ公園内にある開拓先没者慰霊碑を参拝した後、ブラジル日本移民資料館を訪問しました。その後、鹿児島大学OBとの懇談会を開き、前田学長らは、これまでの本学学生の南米実習への協力支援に対し感謝の意を伝え、今後のさらなる協力関係について意見交換を行いました。

翌21日には、ブラジル日本移民110周年記念式典に参加。式典はブラジル国内外から4,000人以上が一堂に会する盛大なもので、日本全国からも各県、大学関係者等の訪問がありました。

最終日の22日、一行はブラジル鹿児島県人会創立105周年記念式典に参加。祝辞、功労者表彰の後は参加者全員で“おはら節”を踊りました。締めくくりにはリオのカーニバルのドラム演奏とダンスが披露され、会は大盛況のうちに終了しました。その後、鹿児島県費留学生と海外技術研修員OBとの懇談会が開催され、鹿児島大学留学時の思い出や感謝が述べられた後、意見交換を行いました。

OS DE FUNDAÇÃO DO KAGOSHIMA KENJINKA



「さつつん保育園」開園式を開催

9月25日、本学郡元キャンパスに新たに設置された学内保育施設「さつつん保育園」の開園式が行われました。

開園式では、前田学長、島総務担当理事(園長)、運営を受託する(株)アイグランの重道代表取締役社長の挨拶やテープカット等が行われ、開園を祝いました。

開園式の後には施設内部の見学も行われ、参加者は説明担当者の話に興味深く聞き入っていました。

また、保育士から園自慢の手作りおやつを試食が振る舞われ、和やかな雰囲気の中終了しました。

さつつん保育園は、内閣府企業主導型保育事業の補助を受け設置され、本学教職員が養育する生後57日から就学前までの乳幼児を対象に、基本保育や一時保育を行っています。



水産学部の西教授が 平成30年度海洋立国推進功労者表彰(内閣総理大臣賞)ならびに 第147回水路記念日に伴う海上保安庁長官表彰を受賞

海上保安庁と協働で離岸流の調査等を実施してきた水産学部の西 隆一郎教授が、8月31日、総理官邸大ホールにて「海域の安全利用と離岸流の理解」との趣意により海洋立国推進功労者表彰(内閣総理大臣賞)を受けました。

海岸から沖に向かう強い流れである離岸流の発生により、毎年マリネジャー中の海浜事故が発生しています。このような状況の中、西教授は、我が国の海岸で発生する海浜事故を防止するため、長年にわたり離岸流等の沿岸域の流れに関する調査研究に従事。その豊富な経験と指導力をもって、海上保安庁による離岸流の調査等に精力的に協力してきました。

西教授は、大きな危険が伴う離岸流の調査にドローンを導入するなど先端技術を活用し、安全かつ効率的に離岸流の調査を実施しています。また、調査によって得られた知見を報道機関等に提供することで、広く「離岸流」に関する普及啓発活動を行い、安全で楽しいマリンスポーツ・レジャーの実現に貢献しています。これらの活動は、マリネジャー等における沿岸域の海浜事故から国民の生命をまもることに繋がっており、今回の表彰は、海上保安庁と協働で実施した活動等が、顕著な功績として認められたものです。

また西教授は9月14日、霞ヶ関の海上保安庁長官室にて、岩並海上保安庁長官から「海洋情報業務(海の調査や海洋情報の提供)への貢献」に対して、第147回水路記念日に伴う海上保安庁長官表彰を受賞しました。

明治4(1871)年9月12日、兵部省海軍部水路局が誕生し、わが国の海図作成が開始されたことから9月12日は水路記念日に定められています。147回目の水路記念日を迎えた今年、海洋情報業務において多大な貢献を果たした西教授の功績を讃え、海上保安庁長官より感謝状が贈られたものです。受賞した西教授からは、受賞の喜びと関係者への謝辞が述べられました。



「鹿児島大学古本募金」を開始 -読み終えた本やDVDで鹿児島大学をご支援ください-

本学では、10月1日から「鹿児島大学古本募金」を開始しました。鹿児島大学古本募金とは、皆様から読み終えた本・DVDなどをご提供いただき、その査定換金額が鹿児島大学に寄附される取り組みです。寄附金は、質の高い教育研究の推進及び地域貢献活動の一層の活性化に向けた整備・充実に役立てられます。

申込受付から査定・報告、および送金は、「古本募金さしやばん」(運営：嵯峨野株式会社)が担当します。古本募金1回のご参加につき、さしやばんからも100円が寄附されます。

○募金できるもの



本の裏表紙、
裏付等にある
ISBNコードを
ご確認ください

【その他、募金できるもの】

DVD・CD・ゲーム・切手・はがき・商品券・貴金属・ブランド品

■ お申込み・お問い合わせ

🔍 鹿児島大学 古本募金

☎ 0120-29-7000 (電話受付) 9時~18時・365日

鹿大「進取の精神」支援基金へのご寄附のお願い

鹿児島大学は、地域活性化の中核的拠点として、学生のグローバル教育の推進や地域に貢献する人材の育成など教育研究支援の強化に取り組むため、鹿大「進取の精神」支援基金を創設し、寄附のご協力をお願いしております。

つきましては、本基金の趣旨にご賛同いただき、皆様のご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

なお、本学への寄附につきましては、所得税法、法人税法上の優遇措置の対象となります。

お問い合わせ先

鹿児島大学総務課基金・渉外係 TEL:099-285-3101 FAX:099-285-7034

E-mail: s-kikin@kuas.kagoshima-u.ac.jp

基金ホームページ: <https://www.kagoshima-u.ac.jp/kifukin/>





進め！ 鹿大生！ STUDENT INTERVIEW

NPO法人GROAD代表
鈴木涼良さん
（水産学部水産学科3年生）



「世界観を変える」海外インターンシップを1人でも多くの学生に ～アツい信念を胸に、本学初の学生NPO法人を率いて奔走中～

鹿児島から世界へ活躍する「人財」育成を目指し、2016年11月に設立された本学初の学生NPO法人GROAD。明治維新から150年を迎えたいま、幕末期に渡英し日本の近代化に貢献した「薩摩スチューデント」にちなみ19名の学生を海外インターンシップへと送り出す事業に取り組んでいます。「体験すると世界が変わります。本気でチャレンジする学生の背中を押したい」。タイでのインターンシップで鹿児島茶の販促活動に従事した自らの経験をもとに、鈴木さんは語ります。

常に意識しているのは「今を精いっぱい生きる」こと。中一の春、故郷岩手で体験した震災から得た思いです。幸い家族、友人は無事でしたが、一瞬にして町が流され、人の命が失われる様を目の当たりにし、日常のありがたさを実感しました。鹿大入学後、さまざまなボランティアやサークル活動を経てGROADの趣旨に共感。2代目会長を引き受けました。「今後さらに活動を発展させ、学生起業のモデルとして最先端を走り続ける存在であり続けたい」。力強い言葉から、着実な歩みと誇りが伝わってきました。

座右の銘

「あきらめない限り、失敗はない」

あきらめたい、心折れそうなこともたくさんありました。でも、あきらめずに自分の信念を貫き、結果を出している方との出会いが私に勇気をくれました。自分も中学時代、陸上競技をあきらめずに続けたからこそ成績を出せたという経験があります。努力は報われるものと思うので、これと決めたことはあきらめずに頑張ろうと自分に言い聞かせています。



さっつんが行く!

SATTUN's Campus Sketches

鹿大キャンパス漫遊記



鹿児島大学公式マスコットキャラクター

さっつん



Vol.11

研究支援センター環境保全施設

(旧 廃液処理センター)

有害性、危険性を有する実験廃液の安全で適正な処理に向け、分別・処理法等について全学へ周知、啓発するとともに、廃棄処分に関する取りまとめを行っています。また、汚染物質の下水への排出を未然に抑止するため、定期的な水質分析を実施しています。

活動のもう一つの柱は、環境保全についての教育・啓発活動です。「研究成果を挙げることに同時に、負の部分をきちんと管理する視点を学生時代に植え付ける(富卓滋施設長)」ことを目指し、化学実験に携わる理系学部生や実験に従事する研究者等を対象とした廃液・廃棄物処理に関する講義・講演を毎年継続して実践。持続可能な社会を担う人材育成に力を入れています。



📷 今号の表紙「稲盛和夫鹿児島大学名誉博士立像」

鹿児島大学卒業生である稲盛和夫名誉博士は、母校である本学に深い愛情を注いでこられ、人材育成、教育、各種支援など多方面に渡り、数多くの貢献をされてきました。また、同氏の貢献は、本学に留まらず、京都賞を初めとした社会全体への貢献など枚挙にいとまがありません。そのような貢献に対し、謝意を表するため、平成29年3月に、これからの担う学生達が多く集う本学郡元キャンパスの「進取の気風広場」に同氏の立像を建立しました。

今号の特集では、今年9月に京都にある京セラ株式会社本社で行った同氏と学長の対談を収録しました。対談では、同氏の学生時代の思い出や本学へのメッセージをお聞かせいただきました。卒業して長い年月が経っても、強く語られる母校への想いに触れてみて下さい。

